

巻頭言 「大統領が来ても」

宇野 元

小さな村の牧師の話から。いつもの日曜日。いつもの教会の礼拝。いつものように説教壇に立ったとき、彼は仰天します。いつもの会衆にまじって、カール・バルトが家族と座っているではありませんか。休暇で来たのでしょうか。牧師の頭に、一瞬、こんな考えがよぎりました。いますぐ説教壇から降りて、バルト先生、よくいらっしやいました、どうぞ説教してください、と言うべきじゃないか。けれども、思い直します。いやいや、それはよくない。カール・バルトも神の言葉を必要としているのだから。気を引き締めて、使者の役目を果たさなければ。牧師は与えられている委託に心を集中しました。

『ギレアド』の主人公、ジョン・エイムズ牧師には、こまやかな思いで日曜日に備えるために、日頃親しんでいる想像がありました。亡くなった娘が、もし主日の教会に来たら、気後れしないで語れるだろうか？ そうして、説教の内容をよく吟味するよう、注意するのを常としていました。じっさい、そのような出席が、少なくとも二回、彼に与えられます。ひとつは、のちに妻となる人が、土砂降りの雨の中、ペンテコステの礼拝に来たとき。もうひとつは、「放蕩息子」ジャックが来たとき。現実には、どちらのときも動揺し、説教の言葉が喉元で灰になるような思いにかられます。それでも、知恵ある心得といえるでしょう。

毎週の礼拝の大切さをおぼえさせられます。

これらの話は、説教者だけでなく、また司式者や奏楽者だけでなく、礼拝に集う一人一人にとって大切な意味があると思います。もし、なつかしい人が、きょうの礼拝に来たら。あるいは、意外な人が来たら。また誰が来ても。

大統領が来ても。今月のタイトルをそう書いて、私が思い浮かべるのは、アメリカの前大統領のバラク・オバマさんです。もしまた来日し、関西に立ち寄ることがあったら。ひょっこり芦屋を訪ねることがあったら。そしてもし、私たちのいつもの礼拝に来たら。そうしたら、いつもの主日と同じように、持ち場にいる兄弟があたたかく迎え、森の明るい空間のような礼拝室へ案内する。一同心を込めて讃美歌を歌い、祈りをささげ、聖書の言葉に集中する礼拝に参加していただく。そんな楽しい想像をします。